「全保連 PRESENTS　世界エイサー大会～交流祭 2018～」

カンファレンス　議 事 録

目　次

【第１部】パネルディスカッション 議事録
自己紹介及び演舞会の感想・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
①メンバーの確保について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
②人材育成方法について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
③団体交流について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
④練習、指導方法について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
⑤創作エイサーの地位、認知の向上について・・・・・・・・・・・・・・・13
⑥次世代、県外・海外団体へのメッセージ・・・・・・・・・・・・・・・・13
質疑応答・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・15

【第１部】パネルディスカッション 事前回答一覧
①メンバー確保について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・18
②人材育成方法について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・20
③団体交流について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・21
④練習、指導方法について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・23
⑤創作エイサーの地位、認知の向上について・・・・・・・・・・・・・・・24
⑥次世代、県外・海外団体へのメッセージ・・・・・・・・・・・・・・・・25

【第１部】パネルディスカッション 事前回答一覧（英語／中国語）
英語翻訳・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・27
中国語翻訳・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32

【第２部】グループワーク 概要
グループワーク概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39

「全保連 PRESENTS　世界エイサー大会～交流祭 2018～」

カンファレンス【第１部】パネルディスカッション

「全保連 PRESENTS　世界エイサー大会～交流祭 2018～」
カンファレンス【第 1 部】パネルディスカッション

１　日　時　　平成 30 年 12 月 15 日（土）15：40～16：40

２　場　所　　宜野湾市立体育館

３　登壇者

コーディネーター

・世界エイサー大使（世界エイサー大会 総合演出）　野底　武光

パネリスト

・世界エイサー大使（鼓衆若太陽　代表）　外間　則光

・世界エイサー大使（古武道太鼓集団 風之舞　プロデューサー）　山城　健

・世界エイサー大使（創作太鼓衆 美らさ　団長）　玉城　幾

・世界エイサー大使（創作芸団レキオス　主宰）　照屋　忠敏

※事前回答での協力

４　テーマ

①メンバー確保について

②人材育成方法について

③団体交流について

④練習、指導方法について

⑤創作エイサーの地位、認知の向上について

⑥次世代や県外・海外団体へのメッセージ

５　内容

自己紹介及び演舞会の感想

（野底）

このカンファレンスでは色々な団体さんの話を聞き、課題や解決方法等を探っていきたいと思います。エイサー大会という場に、ただ集まってただ踊って楽しかっただけではなく、頭も使っていきたいと思います。特に各団体リーダーや指導に当たる立場の人は、しっかり聞いて、問題提起をしながら参加していただけたらと思います。何を言っているか分からないという子ども達は、とりあえず聞いていてください。必ず今後、必要なことになりますので。

それでは、カンファレンスの進行を務めさせていただきます、世界エイサー大使でもあり、本日総合演出を担わせてもらっています野底です。よろしくお願いいたします。

パネリストは同じく世界エイサー大使のお三方です。人選にあたっては、県内で数々の実

績がある上で世界エイサー大使を任命されている方にお願いしました。沢山の経験や情報をお持ちですから、今日はお時間の許す限り引き出せたらと思っております。

それでは、それぞれ自己紹介と演舞会の感想をお願いします。外間さんからお願いします。

（外間）

はい、こんにちは。鼓衆若太陽代表の外間です。世界エイサー大会は、初回の頃（2011 年）からは比べものにならないくらい県外や海外も実力が拮抗していて、すごく研究されているなと感じました。今回、私たちが指導しているワシントンの団体も初めてエイサー大会に参加しましたが、この空気の中で良い勉強になったと思います。私たちも他チームの演舞を見ながら、良いところを取り入れて負けないようにまた頑張っていきたいと思います。

（野底）

僕らは外間さんって呼んだことないですね。いつもは「だいさん」って呼んでいます。
では、続いて山城さんお願いします。

（山城）

はい、こんにちは。古武道太鼓集団 風之舞の山城と申します。よろしくお願いします。

風之舞は結成して 20 年、沖縄本島最南端の糸満市を拠点に活動しています。海外では台湾やインドネシア、県外では宮崎 3 団体、静岡 2 団体と交流しています。

今日の演舞会では、交流している団体の成長を見ることが出来ました。だいさん（外間）がおっしゃったように、以前までは県内チームと県外チームの差が歴然としていましたが、県外や海外のどのチームもよく研究して、良い踊りが出来ていると思いました。

県内チームとしても、もっともっと頑張って創作エイサーを発展させられるよう頑張っていきたいと思います。

（野底）

はい、ありがとうございました。風之舞の山城さんでした。

それでは玉城さん、よろしくお願いします。

（玉城）

創作太鼓衆美らさの団長をしています、玉城です。よろしくお願いします。

僕たちは、世界エイサー大会には初回からは参加していません。当時、僕が宮古島で仕事をしながら団体を運営していたので、仕事と練習時間を確保することだけで精一杯でし

た。なので、エイサー大会には、途中から参加出来るようになりました。

今日の演舞会では、クラフトパーランクーのブースを担当しながら見ていました。まず県外、海外チームはしっかり研究しているということが見て取れました。すごく熱いものを感じることが出来て、嬉しく感じました。

各団体の「このチームが大好き」という想いが伝わってきたので、僕たちもその気持ちを忘れないでやっていきたいなと思っています。団体としては 19 年、僕自身は 23 年程エイサーをやっていますが、もう一度初心に戻りたいなという気持ちになれたので皆さんにお礼を述べたいと思います。

（野底）

ありがとうございます。近年、県内・県外・海外が分け隔て無く、レベルが拮抗していますね。

今年は世界エイサー大会として、宮崎へ指導と交流に行かせてもらったんですよ。皆さんご存じのとおり、宮崎県って今や創作熱がすごいですよね。金子さん（「魂～マブイ～」代表）、宮崎には 30 団体くらい有るのかな？

（金子）

そうですね。

（野底）

もう今ね、宮崎県はスゴいんですよ。ただ数が多いだけでなく、しっかり指導をしていてレベルも高い。宮崎に関わらず、他の県外・海外チームも県内チームと同じくらい、もしかしたらそれ以上にエイサーを愛して練習に打ち込んでいるのでは、と感じました。県内の皆さん、負けられませんよ！頑張ってくださいね。

今日は 3 名の大使に登壇いただいていますが、もう一人すごい人がいないですよね。分かると思いますが、「創作芸団レキオス」の照屋忠敏さんです。登壇いただきたかったですが、明日に自主公演を控えているので残念ながらこの場にはいらっしゃいません。ですが、事前に回答をいただいていますので、このカンファレンスを進行するなかで一部紹介します。

それから海外の皆さん、日本語での会話なので分からないと思います。本日登壇いただいている 3 名と照屋忠敏さんの事前回答について、英語と中国語に翻訳したものを配布していますから、それで追いかけてくださいね。隣の皆さんは助けてあげてください。

それでは、このカンファレンスでは 5 つのテーマについてお話します。各テーマについては、事前に皆さんからいただいた悩みや課題を集約して決めました。

①メンバーの確保について

（野底）

まずはメンバーの確保について話していきます。これは団体によって悩みは様々だと思いますが、特に県内団体はメンバー確保に苦慮していて、加えて男性プレーヤーが中々入らないという悩みが多かったです。

お三方には事前回答をいただいていますが、改めて聞いてみたいと思います。まずは外間さん、いかがでしょうか。

（外間）

僕らも一緒ですね。メンバーは 10 年程前には 500 名程いましたが、今では 100 名弱になりました。当時は今ほどダンスや空手はなく、平田さんがやっている創作劇もありませんでした。公民館のお祭り等でエイサーを披露すると、募集することなく隣の自治会等からどんどん増えていきました。最近は子ども達の選択肢が沢山あるので、それに伴ってメンバーが徐々に減ってきています。

一時期は 8 割のメンバーが女の子でしたが、今は半々くらいで男の子も入ってきています。特に友達の繋がり等で募集はしていませんが、友達や兄弟等の繋がりで入ってきます。私達が公民館講座や市民講座で教えたときに、エイサーを続けたい子を募集していますが、中々広がっていかないというのが現状ですね。

（野底）

すごいですね、最盛期は 500 人もいたんですね。皆さん、実は鼓衆はすごいグループなんですよ。現在のメンバーの割合は、ほぼ半々で男性の方がやや多いということでした。今日の演舞を見ても、力強さがあって男性ならではの演舞がありましたね。

では続いて、風之舞の山城さんは、メンバー確保について衣装を工夫しているそうですが、その辺りをお聞かせ願えますでしょうか。

（山城）

私達の団体は、過去にはピンクの衣装が多い時期がありました。15 年程前の話ですが、衣装を青系に変えた途端、女の子が多いはずなのに男の子が多いと言われて、実際に男の子が増えました。その後、今度は女の子が少ない中、青の衣装に赤を織り交ぜたら女の子が増えました。今は 8：2 くらいで女性が多いです。

一方、今年からキッズメンバーとして 4 歳児から募集したら、今度は逆の現象で 9：1 ぐら

いで男の子が多くなりました。小さな子はエイサーをやりたい男の子が多いんだなと思いました。小学校へ入学するとスポーツ等色々な選択肢が増えるので、その前に少しエイサーを習わせてみるという結果でしょうか。キッズメンバーの募集については、宮古島の「男塾ー武 Doo」を参考にしました。

（野底）

面白いですね。経験によるデータがあって興味深いですね。

加えて玉城さんからも興味深い回答がありました。男の子をどう活躍させるかという点を教えて頂けたらと思います。

（玉城）

美らさは、以前は女の子が多くて男の子は 2 割程度でした。当時は、女の子を意識して衣装のシルエットをキレイにみせていたので、その点は山城さんがおっしゃったように衣装の関係もあり、男の子は 2 割程度だったのかもしれません。

ただ、自分の意見としては、男の子・女の子の分け隔てなく考えています。女の子が多いならばそれを活かすように考えて、男の子が欲しいとは思いつつもあまり仕掛けなかったのが実状です。

現在は、男の子が増えて割合は 5：5 になっています。男の子が 3～4 名入ってから、徐々に増えました。

それで、男の子が増えてきたのを活かす演出を考えるようになりました。子どもだろうが大人だろうが、男の子だろうが女の子だろうが、障がい者であろうと関係ないです。その子が輝くことを考えて、どうのっけていくかってことを考えています。たまたま男の子が入ったときに男の子をメインに考えて取り組んだことが功を奏したのか分かりませんが、今は 5：5 まで増えてきている状況です。でも、今は逆に女の子が欲しいなとも思っている不思議な感じです。

（野底）

バランスが難しいですね。ここで照屋さんの事前回答を紹介しますね。ご存じの通り、レキオスさんは男性オンリーなんですよね。なので男性メンバーの確保については困っていませんが、メンバー確保をする点は難しいと言う回答がありました。

レキオスさんはジュニアの育成にも力を入れています。ある程度認められなければ、ジュニアからレギュラーへ上がれないというステップアップのシステムを構築しています。これが励みになるでしょうし、いずれはレキオスのレギュラーでステージに立つということが、

すごくやる気を生み出すような形になっているそうです。だから男の子達があれほど頑張れるのかなって思いますね。

②人材育成方法について

（野底）

さて続いては、人材育成についてです。どのように育成するか、どのような点に気をつけるか、どのような想いで子ども達と接しているか等について話していきたいと思います。

なんと、この 4 名には共通した理念があります。それは至ってシンプルで「挨拶」です。山城さんから伺っていきましょう。挨拶を徹底する上で、自主イベントの企画から運営まで、メンバー自身が動く環境を作っているそうですが、その辺のお話をお願いします。

（山城）

風之舞は、出来るだけ自主公演を自分たちで運営できるように、3 年程前から音響や照明、仕込みから全てやってきました。今はアウトレットモールあしびなーでイベント契約をしていて、月に 1 回音響を持ち込んでイベントを実施しています。自分たちで設営して、出演して、自分たちで片付けて活動しています。みんなでゼロから作ることで段取りを学び、ステップアップ出来るように考えています。

（野底）

演舞以外にも、準備や片付け等色々なところに気をつけてやられていますね。自分達でイベントをやると成長しますよね。そこでの気付きが学びとなります。ぜひ参考にして頂けたと思います。

次に、玉城さんに伺います。シンプルな理念のもと子ども達と接しているそうですが、その辺をお聞かせ願えますか。

（玉城）

色々な理由がありますが、人生を投げ打って続けていく想いで「美らさ」を立ち上げました。自分は元々、地元の青年会がないところに青年会を立ち上げて、一度は青年会を大きくしようと頑張りましたが、中々上手くいきませんでした。太鼓の音もうるさいのでトラブルがあって、また先輩達が全員不良で 2 個上の先輩の下でやっていたので、上手くいかず 3 年ほどで断念しました。

そういった経験があり、太鼓を、エイサーを、創作エイサーをやりたいという子達に余計なことを考えずに一生懸命楽しんでもらいたいなと言う想いで、僕達は組織化していないで

す。これは一番やってはいけないことですが、組織化にあたって役割分担をすると、子ども達は太鼓を楽しめなくなってしまう。最終的に「辛くなったので辞めます」と言わせたくないので、ほとんどの面倒くさいことは僕がやってます。

なので、美らさは組織として一番弱いと思います。僕が死んだら美らさが無くなると言うやり方をしているので。とにかく子ども達には楽しんでもらいたいと思います。

自分にとって、子ども達への教育はすごく大好きなことで、創作エイサーが上手な子を育てたいわけではありません。誰でも一生懸命やれば上手くなるわけで、稽古をちゃんと出来る心というか、まずは人の痛みを分かる子にならないと社会に出るときダメだと思うんです。

なので、まずは人の痛みが分かる子になって欲しいと小さな頃から言いますね。子ども達にとっては、最初はその意味が分からないと思いますが、僕と長く付き合っていると分かってくるようになると思います。

次に、配慮ができる人になってくださいと言います。イベントの時、配慮ができる子は指示をしなくても勝手に動いてくれるんですよ、誰がリーダーと決めなくても。そこを気付きなさいよと言っています。だれがリーダーということは、あえて決めない様にしてやっています。

人の痛みが分かってくるという点で、10 代の子達にお願いがあります。美らさは社会人が少なくて子ども達が活躍していますが、社会人になると、練習への参加が厳しくなって週 3 回から週 1 回になって、徐々に減ってきます。その時に、一生懸命やっている 10 代の子達は気付かないと思いますが、社会人の子達が練習に来る時は勇気を出して参加しているんです。うちの子達も気付いていないと思いますが、変なプレッシャーを与えていることがあります。お前練習してないぞ、みたいな。それをやってしまうとお互いに良くないので、子ども達には社会人の辛さを分かりなさいよと言っています。人の痛みが分かれば、物事はどんどん良くなるのかなと思っています。

子ども達は団体の中だけでなく外に飛び出していく人達なので、そういうことをわきまえて欲しいです。そうして、長い人生、自分の好きなことで勝負するときに、これまで培った心で挑戦してもらえたらいいなと思って子ども達と接しています。

（野底）

すばらしいですね。覚悟を持ちながら団体運営をされています。

いま話にあった、社会人の辛さを子ども達は理解して配慮してほしいことについて、これは山城さんも言っていましたよね？

（山城）

子ども達は親が連れてくれば、大体練習に参加できますよね。なので、伸ばそうと思えばどんどん伸ばせる。しかし、社会人になると時間が限られるので、今までのように練習に参加出来ない。その中で子ども達は、なんで大人は練習に来ない？と思うようで、幾さんが言われたように無意識に大人へプレッシャーを与えていることがあります。大人メンバーを増やしていきたいと言う団体は多いと思うので、これ大きな問題です。このままの状態でいくと、あと数年したら無くなってしまう団体が増えてきそうだなと感じています。いま頑張っている中学生も高校生も、大人になって続けられる環境をみんなで考えていきたいですね。

（野底）

子ども達、聞いておいてくださいね！大人になったときに苦しむから。みんなで楽しく良い団体を作れたら良いと思います。

美らさの玉城さんには、子どもに対する熱い想いを語って頂きましたが、普段は学校の教員をされています。教員という仕事をしながらその他の時間を全て子ども達に捧げている。今の話を踏まえて、年齢的にも団体運営についても先輩の外間さんいかがですか。

（外間）

各団体で指導方法は違うと思いますが、僕らは出来るだけ大人がやっている仕事を子ども達に伝えていきたいので、どんどん仕事を子ども達に降ろしています。毎年てだこ祭りで演舞をしてきましたが、昔は大人が走り回っていたところ、今は高校生と大学生の若いメンバーが中心になって動いています。僕は舞台袖で「準備 OK か？」と確認する程度です。

イベント運営を自前でやるなかで、出来ることは子ども達にもさせよう、その代わり大人がしなければならないことは大人がしっかりやろうと考えています。

玉城さんや山城さんもおっしゃっていた子ども達の大人に対する感情については、僕も経験があります。「大人は良いとこ取りだね」、「たまにしか練習来ないのになんで遠征行けるの？」と。ただ、普段は練習に来ていないけれど、皆さんが生まれ 10 何年も前から太鼓をやっていて、皆さんより多く太鼓を打っているんだよ、と話をします。子ども達が言っていることは間違いではありませんが、その辺のバランスですよね。子ども達にはやはり 10 年、20 年と打っている先輩達の太鼓の音をちゃんと聞いて、自分たちとの音の違いを理解して、先輩達のレベルまで上達して欲しい。1 ヶ月練習に来ていない先輩がいたら、逆にもっと来てくださいよと歓迎して欲しいですね。

例えば、てだこ祭りの時に出演依頼があったとき、それがきっかけになって練習に参加するメンバーもいます。その時々の子ども達との駆け引きではありませんが、バランスを見な

がら教えていく以外に方法はないと思うわけです。

（野底）

外間さんからあったように、子ども達は「今」しか見られないんですよね。ところが大人になってくると、色々な問題を抱えることになると思います。だから、今の状況だけでは計りきれないことが沢山あって、時間経過の中で色々なことが決まってくるということも覚えてくれると良いなと思います。

照屋さんからも回答があります。子ども達には、まず「挨拶」、それから「靴を並べる」という些細なこと、凡事徹底と言いますけど、当たり前のことをきちんとやっている。強いチームこそ、このような当たり前のことを徹底している印象を受けました。

それから驚いたのが、子ども達の私生活まで厳しく指導しています。例えば、学校は理由無く休まないよう強く言うそうです。加えて、本を読むことを強く推奨しているそうです。自分で物事を考えて意見が言えるようにとのことです。エイサーだけでなく、子ども達の通知書まで見て面談するそうです。

指導の程度は団体によりますが、レキオスのように素晴らしいチームは日常的なことから徹底しているなと印象を受けました。

③団体交流について

（野底）

続いては、団体交流についてお話します。チームや子ども達の成長には交流が必要なのか？、団体交流とは？という質問も沢山いただいています。

まずは、県内の団体では風之舞さんが最も交流を盛んに行っていると思います。山城さんには、交流していて良かった点、苦労している点等を伺いたいです。

（山城）

交流して良かった点は、数多く海外へ遠征することで、メンバー自身の世界地図が広がっていくことを感じています。一般的に、沖縄の子ども達は東京に目が行きがちですが、自分達は台湾・中国・インドネシア等アジア諸国とよく交流をします。沖縄を中心に、東京・宮崎・韓国・中国・台湾等、沖縄の周辺地域に対して、メンバー達は視野を広く持っている。その点は、自分が小さな頃に比べて非常に良いと思っています。

（野底）

良い表現ですね。自分たちの地図、心の中の地図みたいなものが広がっていきますね。

（山城）

生意気ですけど、高校生が俺海外に 2 回しか行ったことないと言っていましたね。

（野底）

昔に比べて、海外に対する間隔は近くなっていますからね。

県内でエイサーをしていたら、大抵の団体は海外へ遠征しますよね。今や海外遠征は普通になったと思いますが、外間さん、当時は海外なんて思いも寄らなかったですよね。

（外間）

僕がやり始めた頃は、とにかく浦添市以外で太鼓を打ちたい、と言っていましたね。

（野底）

那覇ぐらいですか？

（外間）

そうそう。遠征で外部に出たのは、慶良間が最初でした。当時は、一泊で太鼓打ちに行くの最高！と言っていましたね。なので、その後に遠征で海外へ行けるとは思っていませんでした。

（野底）

そうですよね。

交流について色々話していますが、美らさの玉城さん！事前回答を読んで、僕クスッと笑ってしまいました、ごめんなさいね。見た感じね、玉城さんは人を寄せ付けないんですよ。でも話してみると全然話してくれる。一見、話してくれないのではと思われがちですが、「何か聞きたいことがあればどうぞ」と言う事前回答をもらっています。これ本当ですか？幾さん話しかけて良い？

（玉城）

僕の悩みは、黙っていると怖いというところです。普通に喋るんですけど、あまり自分からは話にいかないんです。

（野底）

そうだよね、自分からはいかないよね。

でも、前回大会のチャンピオンですよ。前年度の優勝パフォーマンスを知っている人は圧巻ですよね。だから皆さん興味があるし、話も聞きたいと思っています。だから皆さん、今日の話を聞いて、勇気を出して幾さんって話しかけてみて下さいね。

（玉城）

大丈夫ですよ。

④練習、指導方法について

（野底）

続いては、練習の指導方法についてお話します。実は、照屋さん含めお三方はチャンピオンチームです。チャンピオンチームが普段どのような練習をしているのか興味ありますよね。

前年度チャンピオンの美らさ 玉城さんから伺いたいと思います。

（玉城）

まず、キッズや低学年生の指導に関しては、慎重に指導者を選ぶべきだと思います。気持ちの乗せ方や、ただ楽しませるように接しているとふざけてくるので、本気だよということも教えないといけない。その指導については、自分が責任を持ってやっています。他メンバーにやらせても、恐らくとてもストレスになるので。

ただ、たまに小学校高学年や中高生から教える時間を取っています。どうしても僕が低学年生を教えているときは、全体への指導が行き届かないので、次のステップだなと思った時はコミュニケーション能力を磨いてもらうために、色々考えてペアリングします。結局、メンバー自身が人に教えることが出来ないと、今まで僕に教わったことを理解していないということになるので、そこにも気付いてもらいながら、またお互いに深めてもらおうと考えています。

身体の使い方については難しいですが、美らさは女の子が力強く踊れるんですよね。これについては、自分なりの理論があります。確かにパワーがあると助かりますが、太鼓は親指と人差し指だけでもちゃんと鳴ることを教え込みます。女の子は力では男の子に負けるので、そこは受け入れながら身体の使い方を教えて、デメリットを埋めていく。女の子だからこそ出来る表現を伸ばします。そうした工夫で輝きをつけるというのが美らさです。

普段の稽古は、基本的に僕がキチンとみれる体制を取っています。イベントよりもとても練習を重視しています。今後イベントが増えていけば、断るようになると思います。1年後に団体が衰退することが分かっているので。稽古量が減れば間違いなく下手になると思います。あとは、困っていることがあれば個人的に聞いてきてください。困っていることは、個人個

人で話を聞かなければ分からないので。

（野底）

ありがとうございます。そうですね、美らささんの一つの特徴として、県内の主要な団体としてはイベントへの出演回数が少ないですよね。それについて、戦略的に行っていることが分かりました。続いて外間さんはどうですか。

（外間）

エイサーも和太鼓も一緒で、稽古の時は基本練習をベースにしています。イベントがあるときは、それに合わせて時間を調整します。今の組織では、指導者であるメンバーや上級生が指導します。幾（玉城）が言っているように、指導が出来ていなければもう一度きちんと僕らが指導しなければいけない。どんどん練習を重ねていくと、僕らが教えていたものが薄くなって違う形になっていることもありますので、その時は再チェックをしながら指導しています。

先ほど話に出ていましたが、太鼓は力のある人が打っても出ない音があります。親指と人差指からスタートして、徐々に力を加えて、あとは腕だけでなく身体全体で太鼓を打てば太鼓は響いてくれます。

（野底）

ありがとうございます。

続いて、風之舞さんは古武道が基本にありますが、何か紹介出来る練習方法等ありますか。

（山城）

去年、一昨年と新しい曲を作って振り付けを増やしているところです。風之舞のエイサーでは、締太鼓、パーランクー、大太鼓、こっけい、それぞれのパートに分かれて練習します。その中で、基本であるバチ回しや腰の落とし方等を一番意識させてやっています。それと、今はデジタルオーディオがあるので、反復練習が容易になりました。そうすると、同じ筋肉を使うのでその筋肉が鍛えられて、また疲れてくると上手く力が抜けてくるんですよね。過去には、今以上に同じ所を反復練習していたので、今のメンバーにも意識してやっています。

（野底）

やっぱり、基礎と復習？

（山城）

そうですね、反復ですね。

（野底）

レキオスについては、まずはランニングと筋トレ、持久ランも含めて壊れない身体を作るために徹底的にやっているそうです。そうでないと、あれだけのパフォーマンスは生み出せないのでしょうが、凄いですよね。加えて、学業を優先させて、知力、体力共に期鍛え上げるという徹底した指導だと思います。

あと指導に関する質問の中で、「特別支援の子はどう対応したら良いの？」という話しもありました。これについては、玉城さんの事前回答を紹介させてください。玉城さんは支援が必要な学校で務めているので、参考になると思います。特別支援が必要な子に関しては、その障がいの特徴をしっかり学んでそれに合わせた細やかな指導や声掛けが必要。なので、指導者は受け入れるのであれば、充分に勉強して受け入れてください、ということでした。

⑤創作エイサーの地位、認知の向上について

（野底）

続いて創作エイサーの地位や認知の向上については、時間も迫っているので割愛します。これについては素晴らしい事前回答が得られていますので、後日皆さんで読んでくださいね。

次世代や県外・海外団体へのメッセージ

（野底）

最後に、次世代の皆さんや県外、海外のみなさんへ何かメッセージやアドバイス等あればお願いします。では、外間さんからお願いします。観光立県の沖縄にとって芸能を含めこの創作エイサーも必要であり、そうした中で県外・海外からも文化の継承を心がけながら頑張って欲しいというメッセージを頂いています。

（外間）

昔、琉球國祭り太鼓が出てきたときに、多方面からそれはエイサーじゃないよと、言われたことがありました。でも歴史を紐解いてみると、元々エイサーは沖縄になかった。だからその時代ごとにエイサーが踊られて、歴史が作られるのではと考えています。皆さんが今やっていることを 50 年 100 年すれば、それが古典のエイサーになっていくと思います。

今レキオスさんが小学校へ出向いて、エイサーの歴史を紙芝居で紹介する取り組みを行っ

ています。そのような機会を通して昔のエイサーを学び、今のエイサーを学んでいく。じゃあ次はどんなエイサーにしていこうか、今やっている皆さんがどんどん新しいものを作ってくれたら良いと思います。これからは皆さんの時代だと思っていますので、頑張ってください。

（山城）

各地域で創作エイサーは活躍しています。依頼されて出演する、それだけでも相手の為になっています。大なり小なり誰かの役に立っているので、自信を持ってください。あとは、チームごとに目標を決めて、それを応援してくれる地域の人達に伝えていけば、さらに応援する人達が増えていくと思います。

（玉城）

子ども達は大人の背中を見ているので、僕自身が根を腐らずに今まで通りあほみたいにやっていきたいと思っています。あとは、子ども達はよく大人を見ているので、大人には責任が付いて回るということですね。大人が不平不満を言えば、子どもに影響することを常に頭に入れて、初心を忘れずに挑戦している自分を見せていけたらなと思っています。僕はおじいちゃんになって両足が動かなくなっても車椅子で何とかしようと思っているので、それを若い子達が見て、また自分たちの糧にしてくれたら良いかなと思っています。

次に、各チームには若いクリエーターがいると思いますが、新しいセンスだと思わせてくれる若い世代が出てくることを待ち望んでいます。今やっていることが全てではないと考えて、自分の感性で創りあげるチームがそろそろ出て来ていいと思っていますので、楽しみに待っています。

そうした新しい世代が大人になっていきますが、先ほど話したとおり、大人は子どもの鏡であることを忘れずに活動を続けていけたら、創作エイサーはもっと広がっていくと考えています。ただ、目先のことはあまり気にせず、基本的なことがしっかりしていけば徐々に認められていくと思っています。以上です。

（野底）

ありがとうございました。玉城さんの事前回答でぜひ紹介したい部分があるので、読み上げさせてください。

県外、海外の皆さんは、沖縄県に拠点がないから物理的、精神的、歴史的等の面で不利だと思っているかも知れないことに対して、逆に皆さんにしか生み出せない感性があるのではないかと玉城さんは言っています。これは勇気や励みになりますよね。ぜひ自分達を誇りに

思いながら、自分たちにしか生み出せないものがあると思って活動して欲しいと思います。

話題を戻して、練習の回数ですね。主要な団体の練習は、週 3 回が多いと感じています。回数については皆さん参考になると思いますよ。

それから交流について、福岡から参加してくれた「黒琉」さんは、沖縄県内の「創作太鼓集団 心 ～SHIN～」という団体と交流が深いです。今回は共演というかたちで一緒に大会を盛り上げてくださいました。素晴らしいと思います。黒琉さんと心さんに拍手をお願いします。（一同拍手）

質疑応答

（野底）

最後に、質問をお一人だけ受けたいと思います。

（質問者）※風之舞 玉城さん

幾さんが質問して良いと言ってくださったので質問です。美らさってとても構成が入り乱れて、衣装や振り付け、移動方法もみんな違います。その構成はどこからスタートしたのか全然イメージがつきません。曲を聞いてイメージするのか、それともやりたいことに対して曲を合わせるのでしょうか。それと、振り付けを入れてから移動させるのか、それとも移動が先なのかとか、それが全く想像付かないくらいに入り乱れて面白い構成になっているので、どのように創りあげていくのかお聞きしたいです。また、振り付けする際の考え等を教えていただければ嬉しいです。

（野底）

はい、ありがとうございます。良い質問です。幾さん、笑顔で答えてください。

（玉城）

どうやって構成を考えているかは、すみません、僕自身も分からないです。ただ、ダンスをやる方は 1.2.3.4…と数えて組んだりすると思いますが、僕はやらないです。ビートを刻まないです。参考になるか分かりませんが、テンポをとって拍取って入れていくやり方も知っていますが、それは僕の肌感覚に合わないと思っています。ビートを取っていくと、振り付けが似通ってしまうと思っています。

なので、音楽を聴いたときに下りてくる感情やその時のノリ、というと表現がおかしいですが、自分なりに音楽を聞き込んで自分の想いを重ねています。

最近では、自分の感情というか、いま考えていることにマッチングする曲を選ぶようにな

ってきました。流行の曲に振り付けしていたこともありましたが、今はずっと踊っていたい曲をこだわって振り付けします。

入り乱れた構成については、僕たちの工夫です。美らさは子どもが多いので、一人一人を見ると全然レベルが低いんですよ。それを補うではないですが、どのようにしたらその子の見栄えが良くなるとか、日本代表のサッカーのフォーメーション維持と一緒です。この人を置いたらここは生きるけどこっちが生きない、とかを深く考えながら、色々考えた結果、入り乱れてしまう。ここが美らさの弱みです。シンプルにすると下手くそ加減がバレてしまうのでそこが課題です。もっとシンプルにしたいと思っているので、構成は風之舞さんの方が凄いなって思います。・・・僕はただ好き勝手にやっているだけです。以上です。

（野底）

ありがとうございます。面白いですね、感性でやっていることが良いですね。美らさのスタイルが見えたと思います。

今日の事前回答については、後日皆さんに共有します。特に代表者、指導者の人は是非読んで頂きたいと思います。それから、質問があればどんどん投げかけてくださいね。このような Q&A が蓄積されれば、もっと素晴らしい団体と素晴らしいプレーヤーが生まれていくと思いますので、皆さんで共有していきましょうね。良きライバルでありながら楽しんでいきましょう。

最後に、僕から 1 点です。団体運営をするなかで、外部との調整、情報発信や所在の明確化をしっかりしてほしいと思います。例えば出演依頼を受けた際、調整がとっても疎かで苦情がくることがあります。僕の所にもイベント会社さんや色んな企業さんから話がきますよ。素晴らしい子ども達がいて、素晴らしい団体なのに、このようなことがあるととても残念です。一気にその団体や創作エイサーの評価が落ちてしまいます。

加えて、外部の方が団体に連絡を取りたいと思っても、HP 等の手段がなく連絡が出来ないこともよくあります。現代に生きるのであれば、情報発信は大切なことなのでその部分も頑張って欲しいと思います。

やはり応援してくれる人、イベントに呼んでくれる人、観てくれる人がいてこそ、皆さんは活動できますよね。なので、信頼を重ねていくことも頑張ってみてください。

それでは、これで第 1 部は終了とさせていただきます。皆さま、長時間ありがとうございました。登壇者のお三方にも拍手をお願いいたします。

全保連株式会社
全保連株式会社

Zenhoren PRESENTS
世界エイサー大会
交流祭
2018

野底 武光
（総合演出／
世界エイサー大使）

外間 則光
山城 健
玉城 幾

「全保連 PRESENTS　世界エイサー大会～交流祭 2018～」

カンファレンス（第１部）事前回答一覧

「全保連 PRESENTS　世界エイサー大会～交流祭 2018～」
カンファレンス（第 1 部）事前回答一覧

1　回答者

・世界エイサー大使（創作芸団レキオス　主宰）　照屋　忠敏
・世界エイサー大使（鼓衆若太陽　代表）　外間　則光
・世界エイサー大使（古武道太鼓集団 風之舞　プロデューサー）　山城　健
・世界エイサー大使（創作太鼓衆 美らさ　団長）　玉城　幾

2　質問事項

①メンバー確保について
②人材育成方法について
③団体交流について
④練習、指導方法について
⑤創作エイサーの地位、認知の向上について
⑥次世代や県外・海外団体へのメッセージ

3　回答一覧

①メンバー確保について

※特に男子を確保するのに苦慮している団体が多い。努力、工夫していることなどあればお答えください。

（照屋）

メンバー数としては、決して多くないと思います。大人 16 名・練習生 1 名・ジュニア 8 名・ジュニア練習生 4 名　合計 29 名です。結成当時は 3 名でスタートし、それから練習生が 2 名加わり計 5 名で 30 分～50 分、エイサーのみの演舞で舞台をこなしたものでした。

初期の頃、大人については自分がスカウトし、ジュニア募集はしていませんでしたが地元の父母から依頼されて、小学 4 年生～中学 1 年生 13 名程男子を預けていただきました。父母とも、厳しい稽古になるがそれでも大丈夫か、と同意の上でのスタートでした。とにかくランニングと柔軟体操が基本の稽古でした。演舞 1 曲ごとの振り付けに関しては、時間をかけて取り組んでいたので、今のレキオスの稽古とは違います。

中学 3 年生までがジュニア、高校生から大人のメンバーというように、出演舞台の稽古にもメリハリを付けながら行なっています。10 年程前から、中学校を卒業するとレキオスのレギュラー入り（大人のチームに入ること）を目指した子供達が自然と入団してくるので、特別他の団体から入団はしていません。

ジュニアがレキオスレギュラーに上がり、大人の衣装・演舞をして舞台に立つことがステータスとなっているようです。

最近の悩みとしては、ジュニアの募集をしていますが、中々昔ほど人数が集まらないのが現状です。大人は特別募集をしていませんが、覚悟を持ってやれる方は受け入れしています。
目的を持って団体運営をしていれば、自ずと後継育成に繋がってくると思います。

（外間）
数年前まで男子が少なかったですが、ここ数年は女子も減少してきました。現在の割合は、男子が多いですが、全体的にメンバーが減ってきています。
メンバー確保のためには、地域で獅子舞やエイサー指導を行うこと、また学校と連携して部活動等をしていない生徒に対して声かけをしてもらっています。

（山城）
男性をイメージさせる為に、衣装の中に青色を多く取り入れたこともありました。最近は 4 歳からのキッズ部門を作った結果、キッズ部門の 8 割が男の子になりました。

（玉城）
当団体は結成して 19 年目です。最近のメンバー構成は男子と女子が５：５です。しかしながら、結成 13 年目までは圧倒的に女子が多かったです（2：8）。男子を確保することに苦慮しているという悩みは昔から当団体にもあったが、男子がほしい、女子がほしいというのは少し贅沢な悩みなのかなと個人的には思います。与えられたメンバーで各団体それぞれにしかない演舞を目指すほうが素敵ではないのかなと感じています。確かに男子にしかない力強さは魅力的です。しかし女子には迫力ある演舞はできないのかというと決してそうではありません。むしろ身体の使い方の工夫をしていけば、女子にもキレのある演舞は可能です。
少し話がそれてしまったかもしれないので、『男子メンバーを確保するには？』という視点に戻します。答えになっているか分かりませんが、今現在女子の比率が圧倒的に多い団体の場合、どうしても女子を活かす演舞構成になることが多いかもしれません。そうなっていくとおのずと男子よりは女子が入ってくる可能性は高くなると経験から感じます。小数の男子がいるのならば意識的に男子のみでやる演目を構築してみても良いのではないかなと思います。男子のみの団体さんにはしっかり男子メンバーが入っていることをみていると、男子がやってみたいと思うようなチームカラーも取り入れていかなければ、男子へのアピールとしては弱いのかもしれない。当団体が先ほど述べたように今現在、比率が 5：5 にまでなったのか、当事者である私たちにも本当に分からないです。ただ言えることは、男子が 5 名くらい集まるとなぜかしら自然に男子が入団してくる流れはあります。あくまでも経験談ですが。
最後に男女関係なく新メンバーを確保するという視点にたつと、有効な手段はやはりきちんと告知をする機会を増やすことだと感じています。イベント先での告知は地道な道だが、かなり効果的です。SNS など現代では告知媒体がいっぱいあるのだから情報発信は大事かなと考えます。当団体も『継続は力なり』とつくづく最近実感することが多々あります。参考にならなかったかもしれませんが、メンバー確保、お互いがんばっていきましょう。当団体も大人メンバーが中々いませんので、常に告知をしていきたいと考えています。

②人材育成方法について

※団体活動を通してどのような人間に育ってほしいと考えているか、そのために日々取り組んでいること、心がけていること等お答えください。

（照屋）

入団当初からあまり厳しくせず、子供達はエイサーや太鼓を楽しみながら、遊び感覚で稽古しています。

例えば、練習場の入口にて、靴を並べる・始め終りに挨拶、指導員に敬意を持つこと、ごく普通のことを教えています。また毎学期ごとに通知表を見るようにしています。皆勤や読書量について全体の前で褒めています。(皆勤：辛抱強く・責任感ある社会人として育つように。読書量：読むことで頭の中で創造を膨らませる、感性を磨くため)この二つが出来る子どもは、口うるさくしなくても、成績は自然と伸びていきます。

（外間）

人はそれぞれ一人一人が個性をもっているので指導者として一辺倒な指導ではなくできるだけその子にあった指導をしながら将来社会においてリーダーになれるような人間になってほしいことと団体生活の中でのコミュニケーション能力、そして他人に対してのやさしさをもった人間になってほしいと願っています。

毎年リーダーを自分たちで決めてもらい、そのリーダー中心に出演の連絡やメンバー確保などをさせている。自主性を身につけられるように普段より舞台構成や配置なども提案させ、ミーティングの進行等も行わせています。

（山城）

まずは、自分で考えて行動できる人になるよう指導しています。そのため、自主公演やイベント、月１回のアウトレットモールあしびなーでのイベントを音響準備から片付けまで自分達で行っています。

次に挨拶ができる人になるよう指導しています。練習場に入ってくる時には、大きな声で挨拶をさせています。

（玉城）

どのような人間に育ってほしいかと問われると、いたってシンプルな想いがあります。人の痛みが分かる人になってほしいと考えています。よく子供たちには配慮のできる人間になってほしいと伝えています。自分の近くで悲しんだり、苦しんだりしている人がいたら、ちゃんと気付いてほしいし、見て見ぬフリをしないでほしいです。

そのためには、まずは団長である自分自身が本気で子供たちと向き合わなければいけないと考えています。才能があろうがなかろうが、一人一人の個性を見極め、一緒に努力を重ねることで必ず魅力的な踊り手になるように子供たちの力を引き出す努力を続けることです。

子供たちと信頼関係が築ければ、自ずと心は成長していきます。心の成長が吸収力を爆発的に向上させ、子供たちは信じられないほどの変化をしていきます。心が一番大事です。人間は

素直な気持ちが薄れると、成長が止まってしまうように感じます。『心を育てる』、シンプルですが一番奥が深く、難しいのかもしれません。

心を育てるために入団したばかりの子供たちにはあいさつの大事さを徹底して教えます。また、大人である指導者の想いを素直にぶつけることも大事です。愛情をきちんと注ぐ。だからこそ時には厳しく叱ることもあります。とてもエネルギーのいることですが、人を成長させる場を設けるというのはそういったエネルギーが必要です。

人生を投げ打ってでもやり続けるんだという覚悟をもって、子供たちの笑顔のために私自身の自己犠牲止む無しの精神で CHURASA という団体を運営しています。

このやり方はいわば本当に脆いものです。組織としては本当にダメだと痛感しています。でも私は自分の決断で、このやり方で良いと思っています。団員たちには大好きな太鼓演舞に没頭してもらえたらそれで良い。一生 CHURASA という団体がある必要もない。いつか終わりがあるから美しく生きられるのかなと思います。またいつか新しい命（花）が生まれ、新しい時代を彩ってくれることを若者に期待を寄せながら、自分自身の人生を全うしたいです。まさに今を生きるです。団員一人一人の成長が私の喜びです。それ以上もそれ以下もないです。

③団体交流について

※チームや子どもたちの成長のために交流を望む声があります。団体交流についてどのように考えているか、実績も含めてお答えください。

（照屋）

趣旨・目的などは団体によって異なると思います。ただ、エイサーという共通する目的のなかで、稽古及びレクリエーション含めて「交流」を行なうことによって、お互いに違った角度で自分達の団体を見ることが出来るので、新鮮に感じられてとても良いことだと思います。あとは、講話など通してエイサーのルーツや沖縄の歴史・文化に興味を示してほしいです。

（外間）

私達は、大人も含めて交流なしには今の団体はないと考えています。良い意味でのライバル心が必要です。太鼓に打ち込む姿勢や意気込みが技術を上回ると思うので、やはり交流していく中で色々な話をしたり、その技術を習得するにはどのような稽古を行えば、表舞台を見ただけでは解らない裏の舞台の苦労話しなど聞くことも大事だと思います。

・交流のある団体

・県内エイサー団体：琉球國祭り太鼓・レキオス等

・和太鼓団体：慶良間太鼓・伊是名尚円太鼓等

・県外：宮城県利府太鼓・島根県今福優・北海道聖龍太鼓等

（山城）

交流は大切にしています。色々な人たちと関わり、気づきや学びや刺激を受ける事で視野も広がると思います。特に創作のエイサー団体は、年齢も国籍も色々に交流する機会を作ることが出来るので積極的に交流しています。

・実績（平成 30 年）
①宮崎公演で 6 団体と共演を通して交流。
（西都心華エイサー、pop-M エイサー、魂～マブイ、高鍋しんかんちゃー、
西都 pop-M エイサー）
②宜野座で創作エイサーLUCK と合同練習。
③糸満ふるさと祭りに向けて、竜神太鼓、宇栄原太鼓と共演。
④創作エイサー協議会設立記念「ちむぐくるチャリティフェスタ」へ参加。
（鼓衆若太陽、那覇太鼓、Drum &Dance ＴEAM BP、中城 護佐丸太鼓、創作衆～桜輝～、
創作芸団 REQUIOS、創作エイサーLUCK）
⑤エイサー指導を通しての交流団体
・宮崎：高鍋しんかんちゃ～、西都 pop-M エイサー、瓜倉エイサー団
・静岡：翠鼓仁、琉彗 Ryusei
・熊本：中九州短期大学
・インドネシア：うーまくエイサーしんか
・台湾：台湾太鼓協会

（玉城）
当団体に創作エイサーチームとの顕著な団体交流の実績はありません。19 年という活動の中で団体の環境を守り続けることに必死だったので、その余力もなかったというのが本音です。分かりやすい事例で言うと、私は 5 年間離島で勤務をしながら毎週金曜日飛行機にのって沖縄本島に戻り、土曜日や日曜日を朝から晩までずっと稽古を開催し、月曜日の朝一帰るという生活を送っていました。
団体運営の大半（振り付け、演舞指導、企画、運営など）を団長である私が引き受けているため、他の事に手が回らないのが現状です。私は声をかけにくい独特な雰囲気があると他の大使から言われたりするので、もしかしたら私に声をかけたい方がいたかもしれませんので、この場で謝っておきたいです。
実は私自身人見知りな一面があり、積極的に話しかけるということが中々できないので、もし自分と話をしてみたいと思ってらっしゃる方がいれば、話しかけていただけたらきちんとご対応いたしますのでよろしくお願いします。
団体交流について明確な答えになっていないかもしれませんので、ここで述べてきます。交流はお互いがウィンウィンの関係になれるなら、素晴らしいことだと思います。ただこじれたりした事例も聞いたりすることもあることから、お互いの考えを尊重しながら交流ができることが一番大事ではないかなと考えます。
今回、世界エイサー交流祭ととなり、多くの県外・海外からの団体も参加ができる仕組みが構築できたことは、今後の団体交流の良い機会となると考えます。

④練習・指導方法について

※普段の練習について、指導方法も含めて高いパフォーマンスを維持するための努力等を教えてください。また年配の方や支援が必要な子に対しての指導に悩んでいる団体へのアドバイスがあればお答えください。

（照屋）

①で述べた通りです。団体の代表などは、振り付け構成のテーマやイメージを団員に明確に伝えて、個々の能力を見極めてあげることも大事です。

年配・特別支援者・小さな子供に関しては、指導をしていますが、あまり実績がありませんので、助言できません。

（外間）

週 3 日の稽古でエイサー・獅子舞・和太鼓を行っています。最近は曲中心の稽古になってきており、いざというときの応用が利かないことを感じたため以前のように基礎練習に重点を置き、振り付けや太鼓の基礎を細かく指導するようにしています。基礎体力から基礎稽古は子ども達にとっては非常に苦しくてつまらないものであるが、その必要性を普段から説明していく指導を心がけています。

年配の方や特別支援が必要な子に対して特にこれといった特別なことは行っていません。その子のできる事をさせる、みんなと同じように指導しています。また、メンバーで自然とサポートしていくような雰囲気を作ることを心がけています。

（山城）

普段の練習は、まず 5 分から 10 分のランニングをして体操をした後、半々に別れて向かい合って踊ります。またパート練習（締太鼓、大太鼓、パランクー、こっけい）では、基本を大切にして、声を出す、太鼓を強く叩く、立ち方や静・動を意識させています。

年配の方や特別支援が必要な子などに対しての指導については、私も模索中です。

（玉城）

指導者がきちんとした理論をもって教えることができることは大事ですが、やはり言葉の力や人をひきつける指導力は必須です。特に子供たちの場合は、その都度声かけが重要です。文章で表せるようなシンプルなものではなく、色々な力が求められると考えています。

ただ絶対必要なことは、教える者と学ぶ者の間に信頼関係や尊敬があることです。これがないとスタートしません。良い稽古（練習）とは、やはりチームの人間関係がベースになってきます。

あとは週に 3 回くらいの練習機会は必要だと考えています。3 回が無理なら 2 回で時間を多めに確保するなどの努力が必要です。

年配の方への指導経験はないので答えられないです。特別支援が必要な子に関しては、その障害の特徴をしっかり勉強し、その子の障害にあわせて細やかな指導や声かけが必要になってくるので、もし特別支援が必要な方を指導する場合、指導者は障害について十分勉強をすべきだと思います。

⑤創作エイサーの地位・認知の向上について

※エイサーの活動では貴重な経験が得られるため、学校の部活動と同等の位置付け・評価を望む声があります。社会的に認められるためにはどのようにすると良いでしょうか。

（照屋）

当団体ではスポーツ部に限らず、部活を強制でさせています。周りからみると大変でしょうと言われますが、意外と子供達は淡々とこなしていますよ。大会時期になれば部活に集中しますし、子供に幅広い選択肢を与えてやりたいです。御父母は大変だと思いますが、子供の成長期は人生のなかで一瞬ですからね。

団体から県外派遣や重要な出演関しては、御父母にその旨文書送るようにしています。あとは家庭での方針と考えを尊重しています。

メンバーの通う学校や要請いただいた学校の運動会や学校文化祭等で、エイサーや獅子舞の指導を行なっています。遠征や部活も大きなトラブルはありません。遠征等は受験に関して有利になるよう特待扱いにする等、必要であれば推薦状も出しています。

各団体でしっかりと、コンセプトを持って組織強化（支援者含めて）を図ることが大事です。すぐに結果は出ません、10 年先をイメージしてください。

（外間）

文化継承の視点からみると、琉舞や空手等は高校での部活動として認知されていますが、県内のエイサー部は聞いたことがありません。しかし、県外において、鹿児島県沖永良部高校にはエイサー部があり浦添市てだこまつりに招へいしたことがあります。また、和太鼓についても県外の高校に多数の和太鼓部がありコンテスト等も催されているほどです。中学校文化祭や高校文化祭においてもどちらかというと伝統芸能が主なので、創作エイサーでは、県代表まで行くことが難しい状況です。

私が提案するのは、教育委員会と連携して中学・高等学校の文化祭の一部や、中高生を対象にしたエイサーや太鼓コンテスト等を行うことでエイサーや太鼓等に興味をもつ子ども達が増えるのではと思います。

（山城）

創作エイサー団体が地域社会に与える、プラス／マイナスのことを理解して活動し、発信することが大切だと思います。

プラスのことは、地域の行事や祭り色々な場所で披露する事で多くの人の為になっていること。マイナスのことは大きな音。迷惑をかけてしまう事を自覚して、太鼓を叩ける環境に感謝し、練習場所、祭り会場なので周りに配慮しましょう。

（玉城）

創作エイサーを学校の部活動と同等の位置づけ・評価をしてほしいとあるが、私個人的な意見なのですが、あくまで学校は部活動での成績等を扱うのが基本です。たとえば琉球舞踊やダ

ンスなど多岐にわたる習い事まで学校活動の一環として成績等に評価するのは、どこまでが対象かとなった場合、区別しにくくなります。

近年では県からの依頼による海外派遣や県外派遣などに関し、出席扱いにしてくれる学校も増えてきていますので、活動に関してはきちんと評価していただいていると考えます。ただし、団体としてきちんと文書を持たせるなどの事務作業能力が必要になります。

もしかしたら中学校等で学校の部活をやっている子と、帰宅部扱いで創作エイサー団体に所属している子では、前者が成績面や高校進学面で有利なのかと思ってしまうのかもしれませんが、基本的に関係ありません。大事なのは勤怠状況（無届欠席、欠課、遅刻）や教科の成績が大事です。だからこそ学生メンバーにはそういった教育も必要になってきます。学生は勉強をしっかりした上で、自分が頑張りたい活動をする。学生の本分はまず何なのかを基本に、学校生活と団体活動を両立させてもらいたいと考えています。

⑥次世代や県外・海外団体へのメッセージ

※若い指導者、県外・海外団体等へ伝えたいことやアドバイス等あればお答えください。

（照屋）

創作エイサーの歴史はまだまだ浅いですが、だからこそチャンスが広がっていると思います。創作エイサーで協議会やエイサー大使の集まり、コンクール等の広がりがある中で、団体交流を含め、可能性のある方向を見出すチャンスだと思います。

また、モデルチームと同じ演舞にすることも確かに魅力ですが、若い人材を育てる意味で、オリジナルに挑戦することが大切だと思います。

自分自身、新しい構成などのアイデアは、若いメンバーの行動と発想を参考にしています。要するに、代表やリーダーであっても、いくつになっても学ぶことと挑戦を忘れずにいて欲しいと言うことです。

（外間）

仕事の傍らでエイサー等の指導することは、簡単なことではありません。これから沖縄の芸能は、全てにおいて観光立県沖縄には無くてはならないものになっていくと思います。その中で技術だけではなく歓迎する心、継承していく心も大事にしながら、また自分自身も楽しみながら指導を行ってほしいと思います。県外・海外も同様に文化を引き継ぎながら一番難しい「継続」するためには？を考えながら頑張ってほしいと考えています。

（山城）

好きで団体を立ち上げたと思いますが、好きな創作エイサーを通して社会にどう還元していくかを周囲の方に伝えていけると、応援してくれる人が増え、更にやりがいが増すと思います。

（玉城）

舞台創造に関しては、若い世代には恐れずに挑戦し続けてほしいです。新しい太鼓パフォーマンスを楽しみにしています。それと同時に、もしその団体でジュニアを抱えていたりするの

なら一社会人（大人）として子供たちの見本であるという自覚を忘れないでほしい。子供たちは宝です。

県外や海外団体のみなさんへ。私としては沖縄でやっていようが県外、海外でやっていようが常に同等だと思っています。なぜなら私自身が沖縄芸能に目覚めたのが 20 歳です。それまでは一切興味もなかったです。また住んでいる地域にも伝統芸能はありませんでした。沖縄にいるのに沖縄芸能に縁がなかった。人はゼロから何かを生み出せるものです。逆にみなさんにしか生みだせない感性があるのです。

これからもみなさんから多くの刺激を受けたいと考えます。今後ともお互い刺激を受けあえる関係でいたいです。

「全保連 PRESENTS　世界エイサー大会～交流祭 2018～」

カンファレンス【第１部】パネルディスカッション

英語／中国語　翻訳

【English】

① Regarding securing members, there're lots of groups which face the difficulty of getting male performers. Are there anything you do especially on this issue?

[Chikashi Tamashiro] Now the portion of our members is 50/50, having past 19 years since the team's foundation. Till 6 years ago, we had only 20% portion of males.
Having said that, however, I think the gender itself doesn't matter on the quality of performances. It is more important to create programs with all the members we have together.
Though if I'd have to answer this question, it can be effective to make a male-colored program, which likely to be attractive to guys. And on my experience, after you secured 5 guys in your group, it is not so hard to appeal to others.
At the point of view of securing members overall, publicity can be the best key such as SNS or the notification in any events.

[Takeshi Yamashiro] I used to try to attract them with the costumes in blue color so that they could imagine masculine type of Eisa.
As a result of making a group of kids from aged 4, now 80% of boys consist the group.

[Tadatoshi Teruya] Our team has 29 people and about half of them are males.
At the first time, I invited only a few adults as starting members. Then the local parents suggested me to train their children in our group and 13 juniors, from 10 to 13 years-old boys, have joined us.
Since then, as a securing members' system, we only open our door to juniors, which have to be under 15 years-old, then having been trained, they can stair up to the regular members.
But the problem we have nowadays is there are less juniors than it used be.

[Norimitsu Hokama] Recently we have more males than females, but the problem is the total number itself is reducing. As one of solutions, we're trying to cooperate with the local people; such as schools or local communities, and let the members invite each other to secure human resources.

② Regarding manpower training, what kind of person you'd hope them to be through your Eisa activities? To what do you address yourself in order to reach your aim?

[Chikashi Tamashiro] I want them to be a person who can understand the pain of others. In order that, I myself, have to build relationships where we can face each other's feelings with the children. It is needed to find out their characteristics no matter how they are

talented.
For the better and smooth communications with them, the very first thing I tell the new comers is the importance of greeting. It seems to be simple, but can be very effective.
As a concrete activity, I run a group of kids trying to protect the children's smiles.

[Takeshi Yamashiro] First of all, I want them to be a person who can think and take an action; such as independent performances or events planned by them. Actually, I let the members to run the events in Ashibina once a month, from the preparation of a sound to tidying up.
Secondly, I want them to be a person who can greet energetically.

[Tadatoshi Teruya] The 2 points I take as important are perfect attendance and the amount of reading in their schools. For the reason of the first one, I think the children who can do it are patient, and can be adults who have a sense of responsibility. For the second one, reading, is so that they can train their creative power or refine their senses.

[Norimitsu Hokama] I want them to be a person who can take a leadership in the future society, who have a sense of taking communication in group life, and who have a sense of humanity.
In order that, I let the members choose one leader per year, and let him/her run a part of our group management.

③ About group exchanges, it is said that Eisa groups should have opportunities to exchange each other more for your teams' or the members' growth. What do you think about it?

[Chikashi Tamashiro] I honestly don't have any remarkable experiences, since I was super busy just with running our group from far distance, outside of mainland Okinawa.
Another possible reason seems to be based on my own personality. People tend to hesitate to say hallo to me, and I myself am sort of shy. But I'm very happy to talk with you all, so please speak to me after this.
And if I'm allowed to mention my thought for group exchanges, basically I'm positive, but only on the condition of the relationship can affect beneficial to each other.

[Takeshi Yamashiro] I take the group exchanges as very important. Because the more kinds of people, the more awareness or stimulations we can gain.
As our achievements, we have exchanged not only in Okinawa but also with the groups of outside of Okinawa, or even with the ones in overseas; such as Indonesia and Taiwan.

[Tadatoshi Teruya] I think exchanging each other is very fresh and positive so that they can see their own teams from different perspectives.
I also recommend to receive lectures or join some learning events to know about the origin of Eisa or the Okinawan history and culture.

[Norimitsu Hokama] I think our team couldn't have become what we are right now without exchanging. You can see the rivals mind, techniques and attitudes towards Eisa activities through exchanging. We have actually communicated with the groups inside and outside of Okinawa so far.

④ About coaching, how do you plan your practice menus in order to enhance your team's performance? Could you also give us an advice on what do you keep in mind when you coach elders or the children with any handicaps?

[Chikashi Tamashiro] It is not so simple to answer this question, but I think to build a relationship of mutual trust is required. Yet I don't have an experience of training elders, you would need to learn enough about the characteristics of what their handicaps are like before facing the children.

[Takeshi Yamashiro] If I answer the details, I have the members to do 5-10min of running, exercising, and practices in their own parts.
I think the base is important such as letting out their voices, hitting the drums powerfully, and having good posture.
Regarding training elders or the people with handicaps, I'm also seeking the way.

[Tadatoshi Teruya] Running and exercising are the very basic training.
It is also important to tell the producers image of choreography precisely to the performers, and put each member to the right position based on their skills or characteristics.
I'm also seeking the way of training elders or the people with handicaps.

[Norimitsu Hokama] The training menu consists of Eisa, Shishimai and Wadaiko, which is held 3 times a week. It was tending to be song-based training until recently, though I realized again the importance of basic training that it used to be.
As a training for elders or the children with handicaps, I do not do anything special. Just coach them in the way you usually do for the others. It is also important to let the members to support them on a voluntary basis.

⑤ Regarding pursuing higher status or recognition of the Sosaku (creative) Eisa, what do you think we should to get more positive impact of Eisa on the society as well as any club activities in schools?

[Chikashi Tamashiro] I think it should be different from club activities in schools because it can be difficult to distinguish Sosaku Eisa from any other lesson activities; such as Ryukyu dance or even any other modern things, when it comes to getting a certain reputation from schools for it.
Having said that, if our Eisa activities outside of Okinawa or Japan are the request from the prefecture, recent schools tend to regard the perfomers' absence as equivalent to attendance, under the appropriate procedures. So it can be said that the reputation of Sosaku Eisa itself is getting enhanced.

[Takeshi Yamashiro] I think it's effective to let the society recognize both positive and negative side of Sosaku Eisa and get its understanding.
As positive side, people enjoy the performing arts in local festivals and so on.
As negative side, on the other hand, the sound they make is too loud to be accepted. So the performers should be aware of it, thank the society or the environment that they can hit the drums, and consider how they should behave.

[Tadatoshi Teruya] In our group, we ensure that the students belong to one of any club activities other than an Eisa team. It seems to be very hard, but surprisingly they can make it. I want them to have more choices for their futures.
When we want the students to join in a performance outside of Okinawa, we of course prepare any official papers to make it possible.
Other than that, Eisa can be added in a letter of recommendation for their career recently. It is possible to address this program as an organization.

[Norimitsu Hokama] There are Ryukyu dance clubs or Karate ones in some Okinawan high schools, but there isn't Sosaku Eisa ones.
I suggest to conduct Sosaku Eisa contest for Junior or Senior high schools cooperating with the Board of Education to address this issue.

⑥ Is there anything you'd like to tell to young coaches or foreign groups?

[Chikashi Tamashiro] Don't be afraid of creating new performances. And be aware of that you should be a good example to the children.
For the coaches from mainland Japan or overseas, I think the place doesn't matter when you run your Eisa teams. You can rather create new and unique performances

with your different perspectives.
So I'm very looking forward to see your new world and receive mass inspirations. Thank you.

[Takeshi Yamashiro] I know you founded your team because you love it. But I think the more often you tell what you can return to your society as its profits, the more people who want to support you can gain, and therefore Sosaku Eisa can be more rewording for you. Thank you.

[Tadatoshi Teruya] The history of Sosaku Eisa has just begun, but that's way there are mass of chances. I want you to try your original performances more in order to train the youth and yourself. Keep learning. Thank you.

[Norimitsu Hokama] I understand it is not easy to make it possible to run a team beside your own work. But Okinawan traditional performing arts are getting more essential to its economy. Considering this background, I want you not only to develop your techniques but also to find it valuable to welcome others and inherit traditions sincerely. For the ones from mainland Japan and overseas likewise, I want you to think about how to "continue" your activity, which is the most difficult thing. Thank you.

【Chinese】
①关于如何确保成员
有许多的团队都面临如何确保男生队员的问题。试问是有解决这一问题的方法或努力的方向等？

[Chikashi Tamashiro]
今年是本团队成立第 19 年。最近队员中的男女比率是 5：5。但是，在成立的第 13 个年头，女生占据压倒性的人数（2：8）。本团队在过去就面临了如何确保男生成员的困扰，个人认为能够纠结想要男生或女生是一个稍许奢侈的烦恼。用现有的成员完成专属于各个队伍的表演也是一件非常了不起的事情。不可否认男生独具的刚劲很有魅力。但是，也不能断定女生就不能完成具有魄力的演出。女生只要能充分利用自身条件，也是能完成优美的舞蹈。
这可能有点说偏了，虽不知道这能否回答大家的问题，让我们回到“如何确保男生成员”这一话题。现如今，女生比率较高的大多数团队可能都是在如何利用女生成员上下功夫。但是，依个人的经验看来我认为这么一来女生加入的可能性会比男生更大。有意识地只用少数的男生成员编排曲目也是不错的办法。观察那些只有男生成员的队伍能稳步地确保有男生队员加入可得，如果没有注入吸引男生加入的团队色彩，对男生的宣传力可能就相对薄弱。正如刚才所提及的，本团队现如今的男女比率为 5：5，但作为当事人的我自己也道不出一个所以然。能告诉大家的是，如果我们能聚集 5 名男生队员，其他的男生队员就会很自然的地陆续加入。以上都只是经验之谈，最后不论男女，站在如何确保新成员的角度出发，比较有效方式是着实地增大宣传的机会。在活动举办地宣传的做法既踏实也有效的。借助现代丰富的社交广告媒体宣传也是比较有效的传播方式。本团队最近也切实感受到“持续即力量”的道理。可能不足以给各位带来参考，让我们为确保成员而努力吧！我们队也非常缺少成人成员，会经常多做些宣传的。

[Takeshi Yamashiro]
过去通过用绿色的服装来体现男生的样貌。
如今将满 4 岁的小孩组成了幼儿组，最终有 8 成的组员是男生。

[Tadatoshi Teruya]
在成员人数上，绝对谈不上多。成人 16 名，练习生 1 名，中学生 8 名，中学生练习生 4 名，合计 29 名。谈及如何确保男生成员，在队伍成立之初只有 3 名男生队员，在此基础上加入了 2 名练习生共 5 名。我们就用这 5 人在舞台上完成了 30～50 分钟的纯 eisa 演出。
起初，我自己有去物色一些成年队员，并没有想要征集青年队员。但是受当地家长的委托，我们召集了从小学 4 年级至初 1 的 13 左右的男生队员。我们事先有和家长们交代，练习必将非常严格。在征得家长确认后我们开始了练习。慢跑和拉筋运动是最基础的练习。每一次曲子的舞蹈编排，都花费了许多时间和努力。练习形式上和现在的 REQUIOS 有点不同。
到初 3 为止称为青年组，高中以上为大人组，演出的练习也是张弛有度。大约在 10 年前，许多孩子朝着初中毕业后成为 REQUIOS 的正式成员（大人组）而加入了我们。不接受从其他队伍入队的。
从青年组转为 REQUIOS 的正式成员后，表示着可以开始穿着大人的服饰登台演出。
最近一个比较苦恼的点是，虽然最近也在募集青年成员，但是人数无法像过去那么多。对于大

人没有展开特别的募集。我们希望征召一些有所领悟的队员。

若能怀揣着目的经营团队的话，便能自然而然地与培养接班人联系上。

[Norimitsu Hokama]

几年前确实情况如此，近些年相较女生成员逐年减少，男生成员有所增多。但是整体上的队员是有所减少的。

在学校和地区当中指导舞狮和 eisa。与学校联合，让学校介绍没有加入社团的学生，或者让成员们鼓动其他同学加入。

②关于如何培养人才

大家都想通过集体活动培养出怎样的人才呢？为了实现这个目标我们平时都需要做哪些努力和需要注意哪些事项呢？

[Chikashi Tamashiro]

当被问及要培养出怎样的人时，我的想法极为简单，即希望能够培养出知晓他人苦痛的人。我们主张他们能够成为关爱幼小的人。在自己身边有人感到悲伤或者痛苦时，要能给予关心，不能视而不见。要想做到这步，首先这要求队长本人用真心和孩子们坦诚相待。无论孩子有无天赋，洞悉每个人的个性，持续努力地去发掘每个人的力量，通过共同的努力使其能成为独具魅力的舞蹈者。和孩子们建立了信赖关系之后，自己的内心也能够得到成长。内心的成长会让你的吸引力惊人地增长，孩子们也会出现难以置信的变化。用心极为重要。我认为人如果少了天真，他的成长将停滞不前。“培养心灵”可能是最简单，也是最深奥，最难懂的。为了培养他们的心灵，对于新加入的小孩要和他们贯彻问好（礼貌）的重要性。其次，作为大人的队长将自己的想法坦白的表露出来是非常重要的。要饱含深情。当然也不免有时候需要严厉教训。虽然是非常费劲的事情，但是为了让人有所成长这点努力是有必要的。为了孩子们的笑容，我秉持哪怕人生一无所求也要继续下去的觉悟，凭借着这种自我牺牲的精神经营着 CHURASA 这支团队。这种方式说起来真的是挺脆弱的。我也深切的感受到，作为一个组织这样真的不行。但，我还是果断地采用了这种做法。队员们能专注地沉浸在自己喜欢的 eisa 演出中，那就足矣。没必要一辈子都拥有 CHURASA 这个队伍。因为它终究有一天会完结，所以就让它现在美丽地持续下去吧！待何时再孕育出新生命（花）时，期待年轻的各位能够出彩新时代，我也将为之倾其所能。这就是所谓的活在当下吧。团员每个人的成长就是我最大的欣慰，再无他念。

[Takeshi Yamashiro]

能够自行思考，独立行动。

自发性演出和自发性活动

在 Ashibina（奥特莱斯）每月一次的活动中，成员们会独立完成从音响准备到最后会场整理的任务。

懂得问候（礼貌）的人

在进入练习场地后，能大声向大家问候。

[Tadatoshi Teruya]

从人类成长规律来说，对于刚加入的成员，与其说严厉教育他们，我们更想他们能够享受到eisa 和太鼓的乐趣，在玩乐中练习。

还有要教一些习以为常的事情比如到练习场地后，在入口要将鞋子整齐摆好，在练习的开始和结束的时候要向队长表达问候及敬意。

此外，需要制定每学期的通知书。在全体成员面前褒奖满勤及书本阅览量大的成员。(满勤：为了培养他作为社会人的忍耐性和责任感。书本阅览量：阅读是为了刺激大脑中的创作，培养人的感性一面)能够兼具这两点的小朋友，既不会太吵闹而且成绩会稳步提升。

[Norimitsu Hokama]

由于每个人都有着自己的个性，队长不能不分薄厚而应因材施教，培养出将来能在社会上立足，具备集体生活中所需的交际能力，对他人能够温柔以待的人。队长是每年由大家共同决定的，承担联系演出和确保成员的工作。为了掌握自主性，从平时就要求对节目构造和编排发表自己的意见，同时还需要组织会议。

③关于团队间的交流

时常有听到说为了队伍和孩子们的成长希望能够开展交流。大家如何看待团队间的交流呢？可以谈一些大家取得成绩。

[Chikashi Tamashiro]

在同创作 eisa 团队交流方面，本团队尚未取得什么实质性的成绩。

在 19 年的活动中，说实话我们主要是竭尽全力地维护好团队本身的环境。举一个浅显易懂的例子来说，我在冲绳离岛工作的 5 年间，过着每周周五坐飞机回到冲绳本岛，周末从早到晚组织练习，周一一早飞回离岛工作的生活。由于我本人担任了团队经营的大部分工作（编排，动作指导，策划，运营等），所以无法顾及到其他事情。也经常被其他 eisa 大使说道，要和我搭话时总觉得有所困难，有种特殊的气氛。我也借这个场合和那些想找我说话没找到的人说声抱歉。事实上也因为我性格腼腆，很少主动去找人说话，如果有人能愿意主动找我说话的话，我会非常乐意同他交流。

关于团队交流还未给出一个明确的答案，就此简述要义。

团队间的相互交流能够构建一种互利共赢的关系那是再好不过的了。但是，我也听说过事情恶化的事例，所以我认为在互相尊重对方想法的前提下开展交流是至关重要的。在本次世界 eisa 交流祭召开之际，成功计划组织了许多来自冲绳县外和海外的队伍前来参加，想必这将成为今后团队交流的一个良好机会。

[Takeshi Yamashiro] 重视交流。

我认为通过接触不同的人，接受不同的发现，不同的学习和刺激，视野将得到扩展。特别是创作 eisa 的团队能有机会和年龄层不同，国家各异的人互动，所以应该积极地开展交流。

实际成果

2018 年

① 在宫崎公演，通过与 6 支队伍同台演出，开展交流

（西都心华 eisa, pop-M eisa MINATO, 魂〜MABUI〜

高锅 SINKANCYA， 西都 pop-M eisa）

② 在宜野座与创作太鼓 LUCK 共同练习

③ 在丝满故乡祭中，于龙神太鼓，宇荣原太鼓同台演出，开展交流

④ 纪念创作太鼓协议会成立 “肝心”慈善典礼

（鼓众若太鼓、那霸太鼓、Drum &Dance T EAM BP、中城 护佐丸太鼓

创作众〜樱辉〜、创作艺团 REQUIOS、创作 eisa LUCK）

通过太鼓技术指导开展交流的团队

高崎 高锅 SINKANCYA

西都 pop-M eisa

瓜仓 eisa 团

静冈 翠鼓仁

琉彗 Ryusei

熊本 中九州短期大学

印度尼西亚 UMAKU eisa SINKA

台湾 台湾太鼓协会

[Tadatoshi Teruya]

每个队伍都有自己的主张和目标。然而，我认为 eisa 有一个共通的目标，那就是通过练习及二次创作等交流，成员间互相能够从不同的角度审视自己的队伍，感受当中的新鲜感。再者，通过交谈等方式，让他们对 eisa 的起源，冲绳的历史和文化产生兴趣。

[Norimitsu Hokama]

包括成年队员在内，如果我们没有了交流一定也不会有现在这支队伍。正面意义上的竞争意识，不仅能够提升各自的技术也能提升对 eisa 的态度和干劲。在交流的过程中，可以进行内容丰富的交谈。如为了练就该技巧需要进行怎样的练习，不仅要观察舞台上表象，听寻舞台背后不为人知的辛劳也是非常重要的。同冲绳县内的 eisa 团队（琉球国祭太鼓・REQUIOS 等）和太鼓团队（庆良间太鼓・伊是名尚円太鼓等）及县外（宫城县利府太鼓・岛根县今福优・北海道圣龙太鼓等）都开展了交流。

④关于联系及指导方式

平时都开展怎样的练习？为保证高水准的演出在指导方式上都做了哪些努力？对于如何指导上年纪的队员或者有先天缺陷的小孩，大家有何建议？

[Chikashi Tamashiro]
队长能够在系统理论的框架下教学是非常重要的，需要有语言的力量和能够让人信服的指导能力。特别是对于小孩来说，每次的措辞都非常关键。这一方面不是能简单言传的东西，而是需要下许多功夫。教授必要东西的传授者和接收者要能有相互信任和相互尊重。如果这都没有这无从开始。队伍中的人际关系是良好练习的基础。我认为每周需要有 3 次左右的练习机会。如果觉得 3 次比较困难，那就必须得努力设法确保两次的练习时间足够充裕。对于如何指导年长得成员，我暂无经验所以无法予以回答。对于有先天缺陷的小孩，我们必须要努力学习他的病症，根据他的情况进行细心的知道和关心。队长应该对该病症有充分的学习。

[Takeshi Yamashiro]
开展练习

慢跑 5～10 分钟，体操，打鼓时分成两队相向而立

拆分练习（**缔太鼓**，**大太鼓**，paranku，**搞笑演出**）

指导方式

重视基础。
留意发声，击鼓力度，站姿。
感知动静。
上年纪的队员或者有先天缺陷的小孩的指导
本人也在探索中。

[Tadatoshi Teruya]
如①中所述。队伍的队长等向队员们清晰地传达编舞构成的主题及大致印象，透析每个成员的个人能力是非常重要的。
关于年长年幼及有先天缺陷的成员，我们由于缺少这方面的实际经验所以在这里无法给出意见。

[Norimitsu Hokama]
每周有 3 天围绕 eisa，舞狮，和太鼓进行练习。最近的练习主要以曲子为主，由于感觉到在关键时刻无法运用自如，开始像先前一样注重基础练习，着重细致地指导舞蹈编排和太鼓的基础动作。虽然说基础的体力训练和基本动作的练习对孩子们来说非常枯燥乏味，但是要在平时的时候就要注意指导说明其必要性。
对年长者和有先天缺陷的小孩并未予以特别的指导。像其他队员一样对他们进行指导，让他们完成他们力所能及的。此外，留意让成员们自然地创造出一个愿意扶持的氛围。

⑤关于如何提升创作太鼓的地位和知名度

频繁的活动能给学生带来许多宝贵的经验，我们希望学校能够将它视为和社团同等地位，对其予以评估，但是我们还未能实现。如何提升其社会认知度？

[Chikashi Tamashiro]
学校方面基本都能对在学校开展的社团活动在成绩上予以加分评价，对于像琉球舞蹈和现代舞蹈等形式多样的学习，有哪些是能作为学校活动的一环予以加分评价，就较难区分了。近些年应冲绳县的请求，向冲绳县外和海外派遣了演出队伍，越来越多的学校将这纳入正常出勤，并且对相关活动予以评价。但是这就要求队伍能够有能力提交出规范的书面材料。有人可能会担心相较被视为“无社团活动”的创作 eisa 成员，在学校开展社团活动的学生在成绩和中考方面会有所优势，实则并无关系。重要的是出勤情况（无故缺席，缺课，迟到）和学科成绩。所以有必要对学生成员们就该方面进行指导教育。学生应在好好学习的基础上，做想要努力去做的事情。让他们认知到学生的本分是什么？权衡好学校生活和集体活动。

[Takeshi Yamashiro]
理解创作 eisa 团队给地区社会带来的积极方面和消极方面进而开展活动和传播。
积极方面：可以在地区中的一些活动和庆典等场合中表演，许多人从中获益。
消极方面：主要的消极因素源于过大的声响。要能意识到可能给周边造成困扰这一事实，感谢给我们提供的打鼓环境，照料到练习场地及活动会场的周边情况。

[Tadatoshi Teruya]
我们团队有强制要求成员们参加社团活动。不局限于体育方面的社团。在周围的人看来这有点辛苦，然而你会意外地发现孩子们处理得很轻松。在大会期间，孩子们可以将精力专注于社团活动中，便于给他们提供广泛的选择。对父母来说这可能有点辛苦，但毕竟在一生之中孩子的成长时期只是短暂的一瞬。
对于向冲绳县外的派遣和重要的演出，团队会向其父母发送书面文件，说明大意。尊重各家庭的方针和想法。
在成员所属的学校或者提出演出请求的学校的文化节中，指导 eisa 和舞狮。此外，对于远行公演和社团活动也没遇到特别大的问题。远行公演应有利于应试，予以特殊待遇，在必要的情况下可提供推荐信。
每个团队都应明确贯彻自身的理念，努力强化组织(包括支持者在内)至关重要。构想一个无法立马出结果的 10 年后的蓝图。

[Norimitsu Hokama]
从文化继承的角度看，高中已经认可琉球舞蹈和空手道为校内的社团活动了，而在县内还未听闻有 eisa 的社团活动。与之相比，在县外的鹿儿岛县的冲永良部高中已成立了 eisa 社团，浦添市的“Tedako 祭”也曾多次邀请该团队。此外，在县外的许多高中也有和太鼓的社团，甚至还开展了竞赛活动。就目前的状况而言，在中学的文化节当中，传统文艺仍是主流，创作 eisa 还是难以代表冲绳。
个人提议，可以和教育委员会联合，在部分普通中学或是独立办校的中学的文化节上，举办

eisa 或者太鼓的比赛。通过这种活动可以让更多的孩子对 eisa 和太鼓产生兴趣。

⑥给下一代的寄语

有什么特别想和年轻的队长或者冲绳县外及海外的队伍传达的想法或建议吗？

[Chikashi Tamashiro]

希望年轻一代能够不要畏惧舞台创作，不断挑战。期待能够创作出新的太鼓表演。同时，若队伍中有小孩成员在的话，也请成年队员们时刻树立榜样。每个孩子都是一件宝物。对于冲绳县外及海外的队伍，我认为无论大家身处何地我们都是一样的。我个人真正认识到冲绳文艺是在我 20 岁的时候。在这之前，我对此没有任何兴趣。并且，我所居住的地区也没有什么冲绳文艺。虽然身处冲绳但却与冲绳文艺无缘。人总是能从一无所有创造出东西的。大家一定能够创作出专属于你们的作品。在今后我们也想从各位身上获得许多刺激。希望我们能够形成一个共勉的关系。

[Takeshi Yamashiro]

因为热爱而成立了鼓队，也想用自己喜欢的创作 eisa 回馈社会。若能将这种想法向周边的人传达，想必会有更多的支持者，同时也会增加做这件事的意义。

[Tadatoshi Teruya]

我认为正因为创作 eisa 的历史尚浅，所以机会众多。可以借助讨论会或者聚集 eisa 大使再或者竞赛的形式扩展创作 eisa 的风格，团队的交流也可探讨出新的发展可能。此外，和队伍舞蹈相同的规范动作确实也非常具有魅力，但是站在培育年轻人角度出发，我认为挑战创新也是非常重要的。对自身或者新组成的看法，应参考年轻成员的行动和想法。总之，无论是团队代表还是队长，无论到了多大年纪，都希望你们能不忘学习，不忘挑战。

[Norimitsu Hokama]

一面工作一年指导 eisa 并非一件简单的事情。在今后对于“观光立县”的冲绳来说，冲绳所有的文艺都将是不可或缺的。在这过程中，不仅要有技术还要有一颗欢迎、继承的心，同时也希望各位在指导的过程中也能乐在其中。同样，对于冲绳县外和海外的队伍也希望大家在传承该文化的时候，不忘努力考虑一个最难的课题，即如何“延续”。

「全保連 PRESENTS　世界エイサー大会～交流祭 2018～」

カンファレンス【第 2 部】グループワーク概要

「全保連 PRESENTS　世界エイサー大会～交流祭 2018～」
カンファレンス（第 2 部）グループワーク概要

１　日　時　　平成 30 年 12 月 15 日（土）16：50～17：30

２　場　所　　宜野湾市立体育館

３　役　割

全体ファシリテーション

・世界エイサー大使（世界エイサー大会　総合演出）　野底　武光

各グループファシリテーション　6 名

・世界エイサー大使（鼓衆若太陽　代表）　外間　則光

・世界エイサー大使（古武道太鼓集団 風之舞　プロデューサー）　山城　健

・世界エイサー大使（琉×宮太鼓 鼓之舞　元代表）　良永　達信

・世界エイサー大使（創作太鼓衆 美らさ　団長）　玉城　幾

・世界エイサー大使（宮古島創作芸能団んきゃーんじゅく代表）前里　昌吾

・世界エイサー大使（高鍋しんかんちゃー　会長）　平山　基史

参加者

・各団体より代表者 2 名ずつ　計 44 名（出演団体 20 団体、ゲスト団体 2 団体）

４　概要

①アイスブレイク

第 2 部では、リラックスした状態で他団体同士が交流できるようアイスブレイクを行った。

野底氏がテーマに沿って手を叩くのを合図に初対面同士のペアを作り、お互いに自己紹介を行った。いくつかのテーマ（性別、誕生日等）に沿って同様の流れを繰り返し、他団体同士が打ち解けるよう進行した。

②グループワーク

各団体より代表者 2 名を選出し、団体が重複しないよう 6 グループ（6～7 名／グループ）を作り、進行役として世界エイサー大使が各グループに就いて自由に意見交換を行った。

30 分程度グループワークを行った後、各大使よりグループのまとめを行った。以下、各グループからの意見をまとめた。

【開催形式について】

・若者で構成される団体（特に大学サークル）は 1 年 1 年が勝負であり、社会人以降もエイサーが出来る環境にない人もいるため、目標となるコンテストを望む声が多かった。

・コンテスト形式は回を重ねるごとに出場チームが決まってきているため、交流祭であれば参加しやすいという団体もいる。
・コンテストと交流がどちらもあると、幅広い世代・地域から参加しやすい。

【広報について】
・今回の告知方法を見直して欲しい。若者は大会についてＳＮＳで知ることができたと思うが、それ以外の方々には知られていない。各団体がポスターを預かり、地道に貼る等して協力して広報することが必要。
・大会についてもっと SNS 等（インスタグラム、youtube、ウェイボー、ウィチャット等）で発信してほしい。英語圏ではない海外チームも英語であれば理解できる方が多いため、最低でも日本語・英語で発信してほしい。

【団体運営について】
・特に若いメンバーは大きなイベント等が終わると目標を失って練習に来なくなるという傾向がある。指導者はメンバーに対して常に目標を意識させて、練習やイベントを開催することが大切である。
・他団体と気軽に連絡のとり合える環境があると良い。（可能であれば団体ごとの名簿等）